

郵船トラベル株式会社 様

USER PROFILE



郵船トラベル株式会社

1955年創立の国際旅行公社をルーツとし、1959年に日本郵船株式会社の支援を受けて郵船航空サービス株式会社（現：郵船ロジスティクス株式会社）となり、1994年に旅客部門が分社・独立して郵船トラベル株式会社が設立。業務渡航を主力商品とし、ラグジュアリー客船によるクルーズ、SIT (Special Interest Tour)、30年以上の歴史を持つ「海外ハイキング」「音楽・美術ツアー」などにファンが多い。豊富な経験と知識をベースに開発された高品質・高付加価値の旅行商品を、日本郵船グループの総合力を活かした業界トップクラスの高信頼なサービスで提供している。

所在地：東京都千代田区神田神保町2-2 波多野ビル
URL：https://www.ytk.co.jp/

WANの帯域制御に10年選ばれ続ける「PureFlow」 VDI環境の改善に貢献し管理負担も大幅に軽減

ビジネストラベル商品が主力の郵船トラベル株式会社（以下、郵船トラベル）は、高精度帯域制御アプライアンス「PureFlowシリーズ」を10年使い続けるロングユーザーだ。緊急時のサポートを24時間365日体制で提供するためVDI (Virtual Desktop Infrastructure：仮想デスクトップ基盤)環境を構築し、同時にDR (Disaster Recovery：災害復旧)を目的に東西に分散配置したデータセンターでBCP (Business Continuity Planning：事業継続計画)を強化した際も、帯域制御に「PureFlow GS1」が活用され、通信回線の帯域が狭い小規模拠点でも安定したネットワークアクセスを実現。そして、再び回線帯域増強のタイミングで最新の「PureFlow WS1」を追加採用した。

Anritsu envision:ensure PureFlow™ WS1



人気の業務渡航を支える小規模拠点 サービス強化に帯域制御製品を活用

郵船トラベルは、社内WAN (Wide Area Network)における帯域制御の改善に連綿と向き合ってきた注目すべき企業のひとつだ。最初に帯域制御装置を導入したのは18年前。ネットワーク回線増強のタイミングで同じシリーズの上位モデルは高額だったため、コストパフォーマンスが高かったPureFlowを導入したのが、ちょうど10年前である。

同社は、海外出張や視察・研修ツアーなどの業務渡航（ビジネストラベル）商品の開発と販売における先駆者としても知られ、企業ユーザーの海外出張・海外赴任の際に必要な航空会社やホテルの予約手配を中心に、さまざまなサービスやサポートを提供し厚い信頼を得てきた。旅行前の旅券や宿泊先の手配だけでなく、急なスケジュール変更や緊急事態が発生した際にも、きめ細かなサービスとサポートを提供するため、既存の営業所に加えて小規模拠点（例えば、お客様企業内に臨時に設ける駐在事務所など）を増やしていった。

そこで問題となったのは通信回線の帯域確保だった。当時同社の各拠点にはファットクライアント型の業務用端末が設置されており、そこから東日本エリアにあるデータセンターの基幹サーバーにアクセ

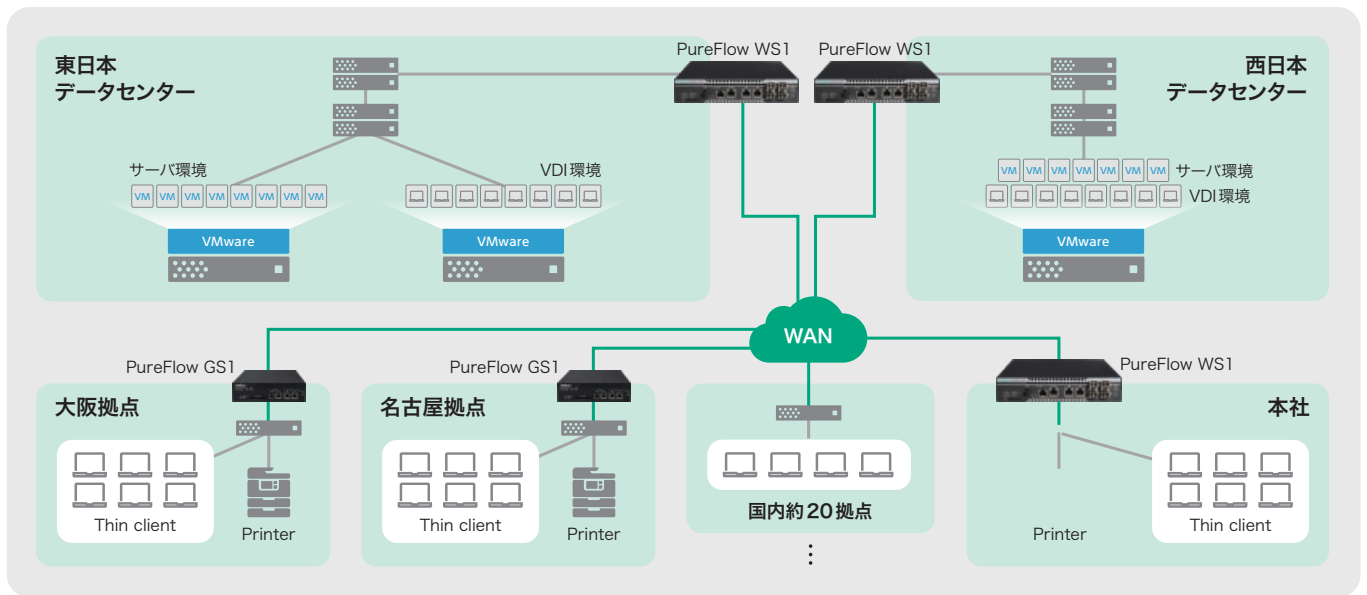
スしていた。しかし、小規模拠点では営業所のように専用線を引くことが難しく、代わりにコンシューマー向け回線などを活用していたため、データセンターからの下り回線では太い専用線側に帯域を奪われて安定した通信が確保できないことが問題となっていた。そのため小規模拠点でも一定の帯域を保証するために導入したのが、SCSKが代理店として提供するアンリツ社製の高精度帯域制御アプライアンス「PureFlow GS1」だった。PureFlow GS1の活用により、拠点ごとに必要な帯域の確保を実現し、その後は業務に支障が出ることはなくなったという。



郵船トラベル株式会社
情報システム部
情報システムチーム
サブリーダー
神尾 のぞみ氏

VDI導入とBCP強化を同時実現 PureFlowの効果を改めて実感

次に、帯域制御の課題に直面したのが、2013年に導入したVDIへの対応だった。海外進出や海外との取引を行う日本企業の急増でビジネストラベルの需要が高まる中、郵船トラベルでは緊急時のサポートを迅速かつ正確に対応できるよう、24時間365日のサポート体制



を整え、リモートアクセス環境の整備に長年取り組んできた。その延長で、お客様の状況を把握している担当者がいつでも、どこからでも航空会社のシステムや予約管理システムにログイン可能な業務環境を構築するために、障害に強いVDIを採用。300名弱の社員のデスクトップ環境を東日本データセンターの中に集約した。

さらに2014年にはBCPを強化するため、西日本にもデータセンターを設置。東日本データセンターのVDIを社員の3分の2が利用し、西日本データセンターのVDIは残りの3分の1が日常的に活用することで、平常時は無駄なく両サイトを活用し、万一どちらかで大規模災害が発生して機能が停止しても、最低限度の災害復旧と事業継続を可能にした。

情報システム部 情報システムチーム サブリーダー 神尾のぞみ氏は、「西日本データセンターにもVDIを設置するのであれば帯域制御装置は不可欠だと考え、東日本データセンターで長年活用実績のあったPureFlow GS1を追加導入することになりました」と当時を振り返る。VDIを導入したことでPureFlowによる帯域制御の効果を改めて実感したという。

「VDIに移行後、データセンターにあるVDIサーバーから各拠点にあるプリンターへ印刷の通信が発生するようになったため、通信回線の帯域が少ない小規模拠点では、プリンターへの印刷量が多い時にスプールが帯域を占有し、VDIが切れてしまったりフリーズしたりすることがありました。PureFlow GS1でプリンター向けの通信を最大3割までに制御することにより、そうした問題はすべて解消できました」（神尾氏）

回線増強に合わせ帯域制御も見直し 結果的に最新のPureFlowを採用

郵船トラベルの帯域制御への取り組みは、2019年1月にも行われた。社員数が増え、VDIへのアクセスも急増したことによりネットワーク回線を増強。それにより、回線の提供形態が1000BASE-LX（光ファイバを用いたギガビットイーサネット）となったため、既存のPureFlow GS1では対応できずリプレースを実施することとなった。

今回はPureFlowシリーズの他に海外の帯域制御製品も検討したが、機能は同等でもコストに大きな開きがあり、結果的にPureFlow GS1の後継機となる「PureFlow WS1」を3台追加導入することが決定した。

「PureFlowシリーズは国内メーカーの製品で、日本語マニュアルがある点やサポートも充実していたことも継続採用を後押しすることになりました。実際にPureFlow WS1に切り替えてみると、コンフィグの内容が変わっていたため、最初は確認作業が発生したのですが、設定をすすめていくうちにPureFlow WS1の方が格段に進化していて簡単になっているとわかり、とても安心しました」と神尾氏は感想を述べる。

現在は、東日本データセンターと西日本データセンターのWANへの出口にPureFlow WS1を各1台設置。両データセンターから各拠点に向けてのVDI通信の帯域制御とプリンターの優先制御を行うとともに、データセンター間通信の帯域制御も実施している。もう1台のPureFlow WS1は東京の本社ビルへ設置した。また、撤去したPureFlow GS1の2台については廃棄せず、本社の次に大きな拠点である名古屋と大阪の営業所に設置して無駄なく有効活用する計画だ。

新しいPureFlow WS1について、神尾氏は「導入後、VDI環境が改善し管理負担も大幅に軽減しました。コンフィグが分かりやすい構成になっており、今後設定変更などが生じても作業時間が短縮できると感じています。また、3台のうちの1台は帯域拡張ライセンスを購入していたのですが、SCSK側でライセンス類もすべて機器に反映し、稼働が確認された状態で出荷されていたのには驚きました。メーカーによっては機器を購入後に適用作業が必要となりますが、そういった作業負担が大幅に削減できたので非常に助かりました」と話す。

今後は、利用者のためにさらなる快適なVDI環境をめざすとともに、帯域制御の管理・運用を可能な限りシンプルで分かりやすいものにし、ネットワークの可視化にも挑戦していく考えだという。「疑問が生じた際、SCSKは迅速に対応してくれるので非常に助かっています。これからも引き続き支援いただけることを期待しています」と神尾氏は語る。

今後さらにグローバル化しボーダレス化する日本のビジネスシーンに郵船トラベルはどのような体験と発見でファンを魅了していくのか。PureFlowとSCSKは共にそのアイデアの実現を支え続ける。